

Title	おせんとおさん：西鶴の場合
Sub Title	Osen and Osan in Saikaku
Author	竹重, 信幸(Takeshige, Nobuyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1957
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.17- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

おせんとおさん

——西鶴の場合——

竹 重 信 幸

序

「くるわ」を舞臺として、其處に展開される豪華絢爛たる遊蕩の一大繪卷は、假令其がどれ程華麗なものであらうと、現代の我々は、その絢爛たる好色生活の背後に、或る種の空虚さを感じない譯にはいかない。さうした「くるわ」といふ特殊な社會を設定し、初めて其中で假の自由な人間交渉が持たれたといふ事、又、其が異常な程の發達を示し、歌舞伎芝居も浮世繪も其「くるわ」と密接な關係を持ち、其等の成長發展にあたつて多大の影響を蒙つたといふ事實を考へる時、我々は此の種の事柄の中に、徳川期の市民達の逞ましい生活意欲を看取する事が出来るのであるが、其反面さうした特殊な社會を設定しなければ、假の自由をも享受する事が出来なかつたといふ所に、時代そのものの持つ特異性、とりわけ時代の秩序の嚴しさを我々は感ずるのである。しかも、さうした社會に足を踏入れる爲には、又其中で、より多くの假の自由を享受する爲には、莫大な財力が必要であつた。其ばかりか、野暮な遊客は、どれ程の金銀を積まうとも、「する」を辨へ、「わけ知り」でなければ徹底的に輕蔑されるといふ、社會であつた。其點、西鶴の浮世草子の出發が先づ遊里を舞臺とし、評判記風の記述を主にして始まつたといふ事は、西鶴の作家としての立場を考へる上で重要な事だと思ふ。この西鶴の態度を折口先生は、「幫間風の理會をもつて、町人を教へやうとした」のが彼の最初の試みであつたと言つて居られる。

『一代男』・『諸艶大鑑』・『一代女』で、西鶴が試みようとしたのは、當時の町人達が理想として心に描いて居た理想像の具象化であつた。一代に榮華の限りを盡した男女の像を、當時の讀者達は、限らない憧憬の眼をもつて眺めた事であらう。現實にはさう容易く叶へられさうにもなかつた彼等の願望は、此等の浮世草子が幾分なりともその代償の役割を果たしてくれた事であらう。其等の作品、殊に『一代男』・『諸艶大鑑』に見られる西鶴の世界観は、約言すればオプティミズムによつて貫かれた世界観である。假令『一代男』が『源氏物語』の諷刺化であつたと言はれるにせよ、前者には後者に見られない、新しい社會層の生命意欲が感じられる。「物のあはれ」よりは「をかしき事」「おもしろきふし」が強調され、「色好み」の内容は、擴大され、近世化され、より人間の體臭を感じさせるやうになる。

ところで、此小論がこれから問題として取上げやうとして居る『好色五人女』には、前述の西鶴の作品と比較して何等かの特色があるであらうか。先づ、『一代男』に比して、文體がかなり平易になつて居る事が挙げられやう。諸國咄の形式を踏襲して居るとはいへ、其上更に彼の新しい試みが附加されて居ると思はれるものに、山口剛氏が説かれた能の番組による構成法が考へられる。それよりも何よりも、話の場が遊里から庶民の日常の生活の場に移されたといふ事は、其迄の西鶴の作品（好色物）から見て、一應注目されなければならぬ點であると思ふ。しかも作品中に登場する人物は、豪勢な大盡でもなければ、名ある遊女でもない。庶民である。其上更に、社會的に強く排撃されるべき性質の姦通事件を二篇までも取扱つて居るといふ事は、其迄には類例のない事である。勿論『五人女』では、悲劇的な事件を扱ひながら、多分に西鶴自身の遊びがみられるが、其反面まことの戀に命を賭けた男女の眞實の姿が、或は邪戀に懊惱する女の像が如實に寫し出されて居る。『五人女』の中には、前述の如きオプティミズムの謳歌は殆ど認められない。佛教的無常觀と、倫理的反省をそれとなく促すやうな口吻が此に取つて替る。

ところで『五人女』の主題は何であらうか。主題はあくまでも「好色」である。「好色」を主題とし、物語の意識をもつて述作されたのが『五人女』であらう。各巻の内題下の傍題を見てもそれは肯けやう。又、實際の事件と彼の作品との間には相當の距離がある事を見ても、彼がかなり素材を自由に取扱つて居た事が分かる。完全とは言へないまでも、『五人女』は短篇小説の體裁を整へて居り、町女の好色生活を主題として五篇の物語を構成した事は、オムニバス映畫の構成法を思はせる。

今回、此小論で特に『五人女』中の二篇、卷二「情を入し樽屋物かたり」と卷三「中段に見る曆屋物語」を取上げたのは、此作品を執筆した時期の、西鶴の作家としての態度に關心を抱いたからであるが、此二篇は二篇とも、世間の注視を浴びた事件であつただけに、西鶴が其等の事件を如何に處理し、作品に移すかといふ事は、甚だ興味のある問題である。以下に順を追つて其考察を進めてみたいと思ふ。

—

おせんの場合

おせんが麴屋長左衛門と不倫の關係に陥る間の事情は、曆屋おさんの場合と全く趣を異にして居る。そしておせんの事件を傳へる「たるやおせん歌祭文」と西鶴の「情を入し樽屋物かたり」では、兩者の間かなりの相違が認められる。即、「たるやおせん歌祭文」の事は、『五人女』より一月早く刊行をみた、京都西村市郎右衛門板『好色三代男』卷三「情の深さ錢の數ほど」に既に見えて居る。

當世のはやり歌、こよひ天満のはしはしきけば、なみだ樽屋のなじみのと、小びくくの鼻たれ（中略）ちと勸進といふ。

とあるのが其である。此歌祭文によると、おせんの不義は、隣家の麴屋長左衛門の無理難題によつて、已む無く惹起されたものであるといふ風に傳へられて居る。當時にあつては此種の流行唄や歌祭文の果した役割はかなり大なるものがあつた。『五人女』と歌祭文の關係については、既に野間光辰氏が『西鶴年譜考證』で詳しく論じて居られるので省略するが、西鶴自身、此種の流行唄や歌祭文に全く無關心で居たとは考へられない。其は『五人女』卷一「命のうちの七百兩の金」の中に、お夏清十郎の流行唄を取入れて居るのを見て

も、明らかに彼が此種の物に關心を寄せて居た事が分かる。

「たるやおせん歌祭文」と西鶴の「情を入し樽屋物かたり」とでは、いづれがより事件の眞實を傳へるか我々には知る由もない。唯一言いへる事は『五人女』の場合には、「戀の山源五兵衛物語」（卷五）でも明らかなやうに、西鶴獨目の潤色が此卷にも認められるといふ事である。しかし、今此處では事件の眞相を、問題として取上げる事は避けたいと思ふ。問題の中心となるのは、西鶴によつて描かれたおせんである。

西鶴は、おせんに「かしこい女」といふ性格を附した。

十四の大晦日に親里の御年貢三分一銀にさしつまりて棟たかき町家に腰もつかひして月日をかさねしに自然と才覺に生れつき御隠居への心づかひ奥さまの氣をとる事それよりすへゝの人に迄あしからず思はれ其後は内藏の出し入をもまかされ此家におせんといふ女なふてはと諸人に思ひつかれしは其身かしこきゆへぞかし（卷二第一章「戀に泣輪の井戸替」）

五人の女の中、奉公人という立場に置かれた女は、おせんのみである。やがて大經師の内儀となるおさんとは、既に娘時代に於て其境遇が異つて居る。おせんは世渡りの術を心得た娘であつた。其利發さは、生得的なものであつて、生活の中から身につけた智慧ではなかつた。おせんにこの様な「かしこい女」といふ性格を附した事は、西鶴の單なる其場の思ひつきでなされたものではない。又おせんには、お夏や、お七や、おまんに見られるやうな積極的な異性への働きかけは、見たくとも其片鱗すらも見出せない。おせんは、

され其情の道をわきまへず一生枕ひとつにてあたら夜を明しぬかりそめにたはふれ袖つま引にも遠慮なく聲高にして其男無首尾をかなしみ後は此女に物いふ人もなかりき（卷二第一章）

と言はれる程身持のよい娘であつた。むしろ餘所目には堅すぎる程の女であつた。しかし、彼女は其だけで終つてしまふ女でない事は、次を見れば明らかであらう。おせんが、老女さんから樽屋の執心を聞かされ、

我に心有人さもあらば何にとて其道しるゝこなた様をたのみたまはぬぞおもはくしらせ給はゞそれをいたづらにはなさじ（卷二第二章「踊はくづれ桶夜更けて化物」）

と言ふおせんの言葉が其をよく物語つて居る。即、戯れに戀をしかける男に對しては、遠慮會釋なく、きつぱりと拒絶の態度を示し、反對に、己に誠の戀情を寄せる男には、其情を受容れるだけの心用意が、彼女にはある。かうした分別は、他の女達には求められない。女の思慮の淺薄さを痛烈に批判して居る西鶴が、こゝでは珍しくさうした律義なおせんの態度に、「是をそしれど人たる人の小女はかくありたき物なり」と、讃辭を與へて居る。

それならば樽屋と結ばれた後のおせんはどうであらう。彼女の中には、あれ程世間を騒がせた異常な迄の性格の激しさは見られないし、淫奔な性格などは見たくとも見られない。

相生よく仕合よく夫は正直のかうべをかたふけ細工をすれば、女はふしかね染を織りならひ明くれかせぎける程に——（中略）——殊更男を大事に掛雪の日風の立時は食つぎを包をき夏は枕に扇をはなさず留守には宵から門口をかため夢／＼外の人にはめをやらず物を二ついへばこちのお人／＼とうれしかり年月つもりてよき中にふたり迄うまれて猶も男の事をわすれざりき（卷二第四章「こけらは胸の焼付さら世帯」）

此處には、樽屋と結ばれた事を喜び、平凡な家庭生活に最大の幸福を見出して居る貞淑な人妻の姿があるばかりである。他の男に口をくれるやうな、浮氣心は微塵もない。

とすると、

おもへば／＼にくき心中とてもぬれたる袂なれば此うへは是非におよばすあの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせん
(卷二終章「木屑の杉やうじ一寸先の命」)

と一轉する彼女の此激しい變貌振りは、何故のものなのであらうか。女の意地と一言で片附けてしまふにしては、餘りに激しい變り様である。

姦通は大きな罪惡である。其は古今東西を問はず自明の理として衆知の所である。殊に徳川期に於ける此面の掟はまことに嚴重を極めたものであつた。密通の妻及び男は死罪を以つて報いられるといふ時代に、何故おせんが敢てさうした舉に迄出なければならなかつたのだらうか。夫を捨て、子を顧ず、自ら生命を絶つ事をも辭さなかつたといふ、彼女の變貌振りには其なりの理由がなければならぬ。しかし西鶴は、其經緯を詳しく述べてはくれない。とすれば、省筆の著しい此間の經緯を、必要な分だけ我々の方で補足して筋を辿つて行かねばなるまい。

不義の起りと言へば、おせんが長左衛門方の納戸から髪をかい角ぐつて室所へ出てきたところを、内儀に見咎められたのが其發端であつた。しかし、見咎められて「そなたの髪は今のさきまでうつくしく有しが納戸にて俄にとけしはいかなる事ぞ」と問はれたおせんは、「旦那殿棚より道具を取おとし給ひかくはなりける」としか答へ様がないのである。其後の内儀の棘々しい痛罵に、やがては居合はせた人々も聞耳を立て興覺めを覺える。しかし、おせんは内儀が事毎に當り散らさうとも、すぐさま其に應酬するやうな輕薄な女では

ない。西鶴は此事も計算に入れておせんを描いて居る。「おせん身に覺えなく物しづかに、旦那殿棚より道具を云々」と申開きをさせて居る。其處には理性をもつた女があるばかりである。分別のある、「かしこい」女は人前を考へるといふ設定のもとに話を進めて居る。しかし、他人の聞く所で罵られたといふ事は著しく彼女の自尊心を傷つけたに違ひない。しかも其時の情景は記憶の底に重苦しく沈潜し、表面穏かな様子を見せて居ただけに、當惑と不快の感情は譬へやうもなかつた事であらうといふ想像を可能ならしめる。其不快な感情を刺戟する内儀の非難の言葉は、其の後も後を絶たない。おせんは濡衣を着せられたにも拘らず、自ら進んで身の潔白を示さうとはせず、濡衣を依然着せられた儘日を送るのである。

當日居合はせた女達は内儀の言葉に興覺めを覺えはしたが、其日の出來事は出來事として、彼女達の記憶に留つたであらうといふ事も考へてみなければならない。「おせんめいわくなから聞暮せしが」の條は以上の事柄を念頭に置く必要がある。

ところで、其場に居合はせた者が、内儀の言葉を信じなければ問題はないが、中には改めておせんに不審の眼を向ける者も出て來ないとは限らない。茶飲仲間の話題としては、打つて付である。其は噂となつて廣がる虞れもある。現におせんは、内儀の根據のない非難を迷惑に思ひながら聞き過して居る。さうしてみると、内儀の非難に取合はないといふ事だけでは濟まされないものを感じはしなかつたらうか。更に想像を逞しうする事を許されるならば、自分の立場の不利な事を改めて覺え、忌はしい未來の想像圖をも腦裡に畫いたのではなからうか。「おもへばおもへばにくき心中」と、心の中で彼女が繰返し反芻して居た不快感徐々に内儀への憎惡に轉換されて行く。しかも内儀への憎惡は、其裏側に、追詰められて行く者が感ずる遣り場のない恐怖の感情を伴つて居る。恐怖の感情は、知らず／＼のうちに、自己を絶望の淵へと追ひ造る。「とてもぬれたる袂なれば」と思詰める彼女は既に自己を見失つて居る。此處に至つてはもう、かしこい、分別のあるおせんは求めるにも求められない。彼女は自ら、自己を社會と切り離してしまふのである。

怒りの感情が攻撃の欲求と表裏の關係にあるやうに、又恐怖の感情は逃避の欲求と表裏の關係を保つて居る。周囲からの様々な攻撃に對して、受けて立つ側の力が弱い場合には、反應は怒りよりも恐怖の感情が力を得て來る。時として其恐怖の感情は逃避の欲求の域にとゞまらず、周囲に、高い絶望の障壁が張り巡らされた場合には、全生命を賭した攻撃性に逆轉する可能性がある。しかも此様に追

詰められた極限に於ける攻撃は、相手への絶望的な反撃だけに盡きるものではなく、時としては自己に對する絶望的な攻撃——つまり、自殺の形をとる事もある。

おせんの場合、既に彼女は調和ある社會生活を志向する意欲は消滅してしまつて居る。彼女に残されて居たのは、絶望的な攻撃のみであつた。「あの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせん」といふ彼女の心の中の此叫び聲は、恐怖の虜となつて土壇へ追詰められ、逃げ場を失つたものの、生命を賭けた逆轉的な攻撃の叫びであると言へやう。此時から、既に彼女は自己の生命を失つて居たと言ふ事も出来やう。

所謂「道ならぬ戀」と彼女の不倫な行爲とは、其性質からいつて本來結びつく性質のものではない。西鶴は、「あの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひせめしより各別のこゝろざしほとなく戀となり」と述べて居るが、おせんの何處に長左衛門へのまことの執心が見られるといふのだらうか。彼女の不義密通は、眞實、愛情（それが假令邪まなものであるにせよ）から出發して、總ての可能性を放棄し、唯一人の男を求めて、社會から轉落して行くといつた筋のものではないのである。彼女の密通は、言つてみれば、あくまでも計畫的な非行であり、仕掛事であるに過ぎない。樽屋に現場を發見されて、おせんを其場に取残し、無我夢中で樽屋の家を飛出す長左衛門には、おせんへの愛情の片鱗すらも見出す事が出来ない。所詮、無理に仕組んだ戀に、眞の愛情など認められやう筈がない。寧ろ、眞の愛情といふ事ならば、其はおせんと樽屋の間に求められる。其故、此物語の終章に於けるおせんと麴屋長左衛門の不義の設定の仕方には杜撰な所があり、結果に於ては西鶴の失敗に終つたと言へやう。

以上述べたつた所を總合してみると、此樽屋おせんの物語の中心は、おせんと長左衛門の邪戀にあるよりは、寧ろおせんと樽屋の戀の方に其が求められると言つた方が妥當ではなからうか。實在した事件は、本來社會的に厳しく糾弾されるべき性質のものであつただけに、其を作品として取上げる場合には豫想外に困難を極めた事であらう。慎重な態度で臨まざるを得なかつた事は勿論である。其故、西鶴は此天満の事件を取上げるにあたつて表題の「好色」とどの邊で折合ひをつけるかで相當思ひ悩んだに違ひない。もしさういふ事がなかつたなら、樽屋とおせんの戀に多くの筆を費さず、もつとおせんと長左衛門の話に力を注いで居た事であらう。ところが實

際には、樽屋とおせんの戀物語の方が話も面白く、諧謔をも交へて一段と生彩を放つて居る。此卷の第四章の後半には、志操堅固ならざる女の多い事を西鶴が歎いて居る箇所があるが、さうした西鶴の教訓的口吻は、プロットの展開といふ觀點から見れば、終章の天満の事件を暗示したものとしてとれる一方、又、其を附け加へる事によつて彼自身の作家としての立場を明らかにしやうとした、いはば彼の作家としての辯明ともとる事が出来る。しかし、假令、究極に至つて「情を入し樽屋物かたり」が失敗に終らうとも、さうした彼の作家たるが故の辯明は、此場合作品の素材の性質からいつて缺く事は出来なかつたのである。結果として『一代男』で發揮された西鶴の強い個性は、卷二に於ては樽屋とおせんの物語の中で放出されたと言ふ事が出来やう。

二

おさんの場合（一）

「情を入し樽屋物かたり」が、おせんと長左衛門の不義密通を充分に描き盡せなかつた事の一因に、此事件が『五人女』刊行の前年に起つた、五篇中では最も耳新しい事件であつたといふ事が挙げられる。人々の記憶に新たなるものがある場合、作家としては、自分が其素材としての事件をどの程度自由に潤色し得るかといふ興味が湧くかも知れないが、其よりも起つた事件が比較的最近のものであるといふ事によつて受ける執筆上の制約の方が大きいのではないかと思ふ。五篇の物語をみると、此事を裏附けるかのやうに、起つた事件が執筆の時期より昔に遇れば遇るもの程、西鶴の潤色は際立つてくる。それだけに、同じ姦通事件を取扱ひながら、前のおせんの物語に比べれば、此「曆屋おさん」の物語は、西鶴が、かなり眞正面から此事件を描へやうとして居る意圖が認められる。勿論此物語の中にも、彼獨得の遊びはあるし、惡ふざけもある。が、少くとも事件の中心人物を堂々と正面に据ゑた事は、前者にはなかつた事として注目してよい。

おせんの場合は、最初の過失は自ら招いたものではなかった。不測の事件が發端となつて遂には身を誤り、死に至つた譯であつて、彼女の不義密通も實の所、本能的な欲求に驅られて起つたものではなかつたのである。其は不義密通と呼ぶよりは、計畫的な自殺行爲と呼んだ方が寧ろ妥當な位である。おせんは自分の仕組んだ翼に自ら深く飛込んで死んで行つた。此に比べておせんの方はどうだつたらうか。

おさんの過失を考へてみると、最初から彼女の行爲には好奇心が手傳つて居り、其好奇心が、本能的な欲求とのつながりをもつてゐるだけに、其惡戯にも等しい行爲は中途で止まる事を知らないのである。過失の責任は、當然彼女が負はなければならないし、又彼女にとつてはどうにも辯解の餘地のない過失なのである。おさんは、其過失が自ら招いたものであるが故に、彼女自身も全く後へ退く事が不可能である事を覺つて、恐怖に戰く。

主人の妻と密通した者は、男は引廻しの上獄門、女は死罪、主人の妻へ密通の手引をした者は同じく死罪といふ恐しい制裁が控へて居る時代である。

「よもや此事人にしれざる事あらじ」と覺つた彼女の前に、この制裁が大寫しとなつて迫つたであらう事は想像する迄もない事である。到底二人が、死の手から逃がれる事はできないのを承知の上で、おさんは逃避行を企て、「此うへは身をすて命かきりに名を立茂右衛門と死手の旅路の道づれ」と、不倫な關係を一層深める方向へ向かふのである。早晚彼等は死に直面しなければならない。他者の斷を待つか、自ら斷を己に下すか、いづれか其二者のうち一つを選ばなければならない運命にある。さうした追詰められた狀況の中で、「人のとがめもかへりみず外なる事に身をやつ」す茂右衛門の行動は、一見不可解の感を抱かせる。しかも、これといふ用もなしに、たゞ都戀しさに姿を變へて「旦那殿の町」を窺かに訪れる彼の行動は、其感を一層強くさせる。

ところで、おさんと不倫な關係になる以前の茂右衛門を、西鶴は、

此男の正直かうべは人まかせ額ちいさく袖口五寸にたらず髪置して此かた編笠をかぶらず。ましてや脇差をこしらへず。只十路

盤を枕に夢にも銀もふけのせんさくばかりに明しぬ。(卷三、第二章「してやられた枕の夢」)

と述べて居る。其故に、かうした質直な男であつた茂右衛門の變り様に我々は改めて驚かされるのである。變貌の著しさでは、おさんも茂右衛門にはひけをとらない。嘗てのおさんに對しては、

夫婦のかたらひふかく三とせが程もかさねけるに明暮世をわたる女の業を大事に。手づからべんがら糸に氣をつくしすへゝの女に手紬を織らせて。わが男の見よげに始末を本とし、竈も大きくさせず小遣帳を筆まめにあらため。町人の家に有たきはかやうの女ぞかし(卷三、第二章)

と述べて、貞淑で堅實な大經師の内儀の風格をよく表はして居る。

とすると、「うれしや命にかへての男じやもの」と「魂にれんぼ入かは」るおさんを、我々は如何に考へればよいのだらうか。二人の變貌の著しさは、總て彼等自身が犯した一夜の過失に還元させて考へる事が出来る。

過失とは言へ、おさんの惡戯は度を過ぎたものであつた。夫の不在も確かに彼女の過失と關聯をもつて居たであらう。彼女は自律の戒めを自ら徐々に解いて行く。後へ退けず、自己の犯した過失が何に通ずるかを覺つた時、彼女は現實の生活の場を捨てて逃避を企てた譯であるが、おさんと茂右衛門がこの一夜の過失を契機として逃避を企てたといふ事は、換言すれば、其時から調和ある社會生活を放棄し、當時の社會から完全に脱落してしまつた事を意味する。さうした狀況の下では、人間の理性に基く判斷は生彩を缺き、誠に力ないものになつてしまふ。理性が急速に瓦解して行く時、逆に人間の本能的なものは、崩れ去つた理性の枠を押除けて周圍に伸び廣がる。おさんが一度は眞劍に投身自殺を思ひ立ちながら、茂右衛門の言葉で其を思ひ留まつてしまふ箇所が、其事を物語つて居る。所詮、死に價する大罪を犯してしまつた彼等に、正常な人間の思考を要求するのは無理な要求と言はなければならぬ。罪の意識を排除しよ

うと努力しても排除し切れず、彼等は絶えず追手が来はしないかと怯える。彼等を大きく支配して居るのは恐怖の感情である。しかも恐怖の感情と並行して本能的な生への渴仰が彼等の中に存在して居る。彼等が罪の意識を身を感じながら、飽く事なく愛欲の世界を彷徨するといふのは、裏を返せばさうした愛欲の世界に一時なりと身を沈め、本能の力によつて極度に昂じて居る恐怖の感情を抑壓しようといふに他ならない。しかし、其で恐怖の感情を完全に抑壓し得るといふものではない。其は唯、恐怖の感情を一時麻痺させるに過ぎない。一見激しく見える彼等の愛欲追求は、眞に恐怖の感情を除去し得るものではなく、一時的な力のない自己欺瞞であり、自慰的行爲に過ぎない。一見して、不可解な、罪の上に罪を重ねるといつた彼等の行動は、異常な環境に置かれた人間の、異常な行動として見なければ、眞に彼等の行動を理解する事にはならないのではないか。

早晚、死に直面せざるを得ない人間にとつては、あらゆる機會が自己の生を認識する機會となり、其機會に於ける體驗は重要な意義をもつものである。其認識の仕方、又認識したもの、が、ノーマルな環境に置かれて居る人間の其とは數段の開きをもち、ヴィヴィッドで、極めて異質的なものであつても、別に不思議な事ではない。彼等は限られた時間の中で、勢一杯生命を燃焼させやうとする。極めて特殊な状況（それは限界状況として考へられる）の下にある彼等に、理性の力が重きを得よう筈がない。

時代の倫理は彼等の掻き立てられた激情の中に屢介入する事を妨げられる。西鶴の描かんとした所は「好色」のおさんであつたらう。しかし、描かれたおさんは「好色」以上のものを備へて居るのである。

町娘の戀は、一途で激しく純粹である。其故に、又お夏やお七の不幸な結末は、我々の胸を打たずにはおかぬものがそこにある。これに對應する人妻の場合はどうであらう。おせんの場合は兎も角、おさんの場合には、假令其動機が責められるべき性質のものであらうとも、一度眠つて居た情欲が目覺めると、其は娘達の戀には見られない程の激しさを帶び、複雑さを伴つて輝き始める。おさんの邪戀の中には、人間の體臭が籠つて居る。靈と肉との間を彷徨するおさんに、救ひ難い人間の迷ひと懊惱を看取する事が出来よう。

おせんには自律の厳しさがあつたが、おさんには、其を求める事が出来ない。主従の關係にあるおさんと茂右衛門が、逃避行を續けて行くうちに、本來の身分關係を徐々に取去つて行く心理の過程には興味深いものがある。茂右衛門を頼りに、逃げ得る限り逃げ延び

ようとするおさんには、斷ち難い生への執着が認められる。彼女の内なる生命が、其を志向させるのである。時代の秩序に自己を適合せしめようとするに於ては、西鶴の描いたおさんはあまりにも人間的であり過ぎた。茂右衛門とても同様である。

それ故、彼等が「さら／＼策期いやしからず世語とはなりぬ」と言はれるやうになる迄には、幾多の曲折が其間にあつた事であらう。彼等が描へられ、やがて死に臨んだ時、其處には深い罪の意識よりも、恐怖から解き放たれる事によつて生ずる安堵感と疲労感と虚脱感とが、更に或る充足感が其を凌駕して居たのではなかつたか。

三

おさんの場合（二）

秩序の確立された社會では、人間は其秩序の實踐者乃至は擁護者として、初めて其存在を許される。其社會に生きる限り、人間は其社會の秩序に自己を、又自己の行動を合致せしめなければならない。しかし、其反面、人間は時代及び社會の秩序からより遠ざかり、自己の持つ生命を自由に伸展させたいといふ本能的な欲求を持つ。其故、人間は許容し得る限り、自己及び自己の生活を時代の、又社會の定めた秩序の線に沿つて進めようとするが、時として餘りにも其秩序が厳し過ぎ、許容の限界を起えたと、逆に今度は本能が其秩序に對して抵抗を試み、秩序の枠から脱しようとする。此様に人間は自己を、時代や社會の秩序で律し、修正しようとするが、其には自づと限度がある。人間の原初的欲求は如何なる場合にも閑却する事は出来ない。しかも其欲求は個人の生活のあらゆる部分に潛み、纏はりついて離れようとしなばかりか、絶えず充足される事を渴望して居る。

『五人女』で取上げられた實在の事件も、さうした個々の人間達の内部に潛む人間本來の欲求が、秩序によつて律しきれず、遂に秩序の枠外へ溢れ出た爲に發生した社會的悲劇であると考へられる。

しかも人間の欲求は、時として自分が理性で既に納得したつもりで居る秩序に對してすら、挑みかゝつて自分を確かめてみたいといふ衝動に驅られる。

おさんがりんの痴話文の代筆をする件がある。茂右衛門のうちつけたる返事に憤滿を覺え、「かづ／＼書くど」いて遣るおさんは、其時から既にりんの爲に筆をとつてゐるのではない。「茂右衛門を引なびけてはまらせん」と口惜しがるおさんは、自分の心に夫以外の男の影が宿つて居る事に氣がつかない。ましてや、如何なる危険が己の内に潜んで居るかは知る由もない。此だけでは不義が成立したとは言へないが、この兆はやがて具體的な形をとつて表面化し、思ひ切つた彼女の行動にまで至る。おさんがりんに成代つて、其寢所に忍び入り茂右衛門を驚かさうとした彼女の度はずれた悪戯が其である。「町人の家にありたきはかやうの女ぞかし」と迄言はれたおさんも、自分自身の中に潜む本能には勝てなかつた。取返しつかない状態に至つて、初めて彼女は自分の行爲が如何なる性質のものであるかを知つて我に歸る。不義密通の報ひの恐しさを改めて思ひ浮べた時から、彼女の内にあつた倫理觀は動搖し始める。やがて其は急速に瓦解の一途を辿る。おさんは自分の行爲が既に修正しきれない事を悟つて逃避の道を選ぶが、途中で一度自殺を考へる。それは絶え間ない恐怖から解放されたいといふ欲求と倫理的反省によつて自己の行爲を己の手で清算し、時代の秩序へ合流したいといふ願ひが交錯して、自殺を思ひ立つに至つたのではなからうか。彼女の中に於ける相剋は、其迄に既に發生し持續し來つて居る不協和音（時代の秩序の枠内で、其秩序に即應した生活を協和音とするならば）にも等しいものである。そして、命限りに浮名を立てようと自暴自棄になつてしまつた時、おさんの生活に於ける不協和音は、一大音響に取つて替る。

お七についても同様の事が言へる。放火を思附くお七の意識の世界には、時代の秩序も其行爲の代償たるべき刑罰も浮かんでは來ない。彼女の中に在るのは、吉三郎への激しい戀慕の情だけである。

西鶴の『五人女』は、此様な不協和音的な、破調的なモチーフを作品の生命とした所に作品としての大きな意義がある。不協和音的な戀愛は、秩序の強固な社會では、長く其生命を保持する事は難しい。しかし其だけに不協和音の與へる印象は、協和音的生活者にとつては強烈なものとならう。『五人女』に於ける悲劇的宿命を背負つた女達が、人間の本能の欲求に驅られて、強固な秩序の壁に無謀な

抵抗を試みる時、壁の中で擴大し膨脹する個々の生命と秩序の壁とがぶつかり合ひ、打ち合ふ音響は強烈である。生命の燃焼が其處では一段と明かるさを増して、秩序の壁を照らし出す。お七は自己の生命を力一杯燃焼させたが、結局、其強固な秩序の前に屈せざるを得なかつた。又、おさんにしても、自分の行爲の非を覺つた時、彼女は時代の秩序との對決を回避する譯には行かなかつた。が彼女は其現實の秩序から本能的に身を退けた。彼女が自滅の谷間へ一步步下りて行く時、人間の中に存する生命的なものへの志向性は、生命の欲求が充足されて行く度に、實在感を深めて行く。切戸の文珠堂で一夜を明かした以後のおさんは、全く自己の生活を、時代の秩序で論理的に修正する事を諦めてしまつて居る。一々の機會は生を認識する貴重な機會として受取られる。

おさんにしても、お夏やお七にしても、又おさんにしても、彼女達は總て時代の落伍者であつた。時代の倫理について行けなかつた彼女達は、秩序の軌道から轉落し、究極に於いて或る者は佛を求め、或る者は逃亡の果に捕へられ他者の手によつて絶命し、又或る者は自らの手で自己の行爲一切を清算して死んで行つたのである。

四

『五人女』の中に現れる悲劇的な結末を背負つた女達も、それ／＼の男達に巡り逢ふまでは平穩な、調和ある生活を營んで居た。彼女達の惹起した事件は、當時の社會に生きる他の一般の人間達にとつてセンセイショナルな事件であつたとはいへ、その中の或る者は、此事件を取扱つた『五人女』に、單なる好色的な興味を抱いて飛びついて行つたかも知れない。

『五人女』の主題は、前述の如く好色に求められる。此作品では、『一代男』や『諸艶大鑑』には殆ど見られなかつた哀調が漂つて居る。又倫理的口吻が隨所に散見せられる。其を讀者が感じ取らない筈はなかつたらう。恐らく西鶴も、其迄手掛けて來た好色物と同じような調子では執筆に臨めなかつたに違ひない。浮世草子の作者である西鶴には、それなりの作家としての責任が課せられて居る。好色本に期待を寄せる讀者を彼が考慮したにしても、西鶴が全面的に彼等の意に従ふといふ事は考へられない。作家は有機的な生命の

具現者であると同時に、他面、倫理的合理性の代辯者たらざるを得ない。即ち作家は其意識に於いては、時代の秩序の擁護者である。又さうあらねば、彼は作家としての存在を認められない。其生きて居る時代から、又社會から失脚する憂目を見なければならぬ。其故、自己の創作行爲が、時代の倫理からより遠ざかるやうな破調的モチーフを取扱はねばならない場合には、作家は其事について辯明し、苦慮し、反省した事を表明せざるを得ない。

ところで、『五人女』に於ける西鶴の人妻の扱ひ方は、おせんの場合にもおさんの場合にも、其處に或る冷やかさを感じないでは居られない。其に反し、町娘の場合には、放火といふ重罪を犯したお七に對してすら、かなりの同情をもつて執筆にあたつて居る。お七の無謀な行爲を責めるよりは、若くして世を去らねばならなかつた娘の生命を惜しみ、歎いて居る。其事はお夏の場合にも言へる。それならば、不義を犯した人妻達に對する冷やかな西鶴の態度は、何が原因となつて居るのだらうか。『五人女』には『一代男』にあまり見られなかつた、時代の秩序を反映するやうな教訓的口吻が目立つて居る。しかも、さうした口吻は『西鶴諸國はなし』巻四の二の「忍び扇の長哥」に於ける、かなり大膽な作者の不義に對する持論と一見矛盾するかのやうに思はれる。が、よく考へてみれば、此、西鶴の不義に關する見解と、『五人女』で示した西鶴の不義に對する態度とは、決して矛盾するものではないといふ事に氣附くであらう。彼の作家としての態度は時代の秩序を眞向から否定する態度ではなく、寧ろ外見はあくまで時代の秩序を擁護する立場をとつてゐる。其は西鶴が作家として立つて行く爲に必要缺くべからざる假裝であつたかも知れない。考へを飛躍させるなら、彼は別の所で新しい秩序を、道徳を求めて居たかも知れない。

しかし、西鶴個人が、どれ程反撥してみても、それであの強固な、時代の秩序の枠が弛むといふものでもない。抵抗するにしては餘りにも高く、固い障壁であつた。彼が作家としての責任をどの程度に認識して居たか、全貌は到底知る事が出来ない。が、所詮作家の背負はねばならない責任は彼に課せられて居るのであつて、其を回避する事は出来ないのである。

其故『五人女』に見られる教訓的口吻は、彼が育つた倫理的領土を足場として、しかも作家としての責任を絶えず感じながら、時代の倫理の方向へ向つて接近して行つた時に生じたものであると考へたい。西鶴は『五人女』を通じて、徳川封建制度の下で不當な束縛

を受けて居る町人達の反抗精神を形象化したと急速に結論を出してしまつては、前述の如き、彼の倫理的な口吻は説明がつかなくなつてしまふ。又假令彼が不義の概念を明確にし、施政者の不當な束縛を責めてみたところで、時代の秩序に眞向から反旗を翻す譯にはいかないのである。

讀者の場合にも、時代の秩序は等しく彼等の上に重くのしかゝつて居る。彼等は其秩序と、彼等の内部にある生命の必然的な欲求の間で、絶えず自分が動搖し、懊惱して居るのを知つて居る。問題は、溢れ出ようとする奔放な生命を、其衝動の赴くまゝに放出させるか否かにある。しかし、讀者にとつても設立された秩序の枠は餘りにも高過ぎ、破壊するに足る餘りにも強固過ぎる。かへつて、その枠の方が、個人の生命力よりは強い力をもつて居る。其締めつける力は強く、決定的な力をもつ。

故に讀者は其枠をより強固なものとして認識すればする程、彼等には、彼女達の事件が悲劇的な色調を帯びたものとして受取られる。勿論『五人女』を全くの悲劇として見る事は妥當ではないし、西鶴自身も、近松の如き態度でもつて悲劇としてあのやうな事件を取上げやうとはしなかつた。だが、彼女達の悲惨な最期は、よしんば、其處に好色的な興味を織込んで物語つたにしても、讀者達は、過去に於ける此等の事件についての記憶を、生々しく甦らせたであらうし、又好色に對する興味の満足以外の何物かを『五人女』から感じ取つたに違いない。